

# 日英比較表現論

小 川 洋 通

## 1 人間中心・状況中心

一般に英語では、表現において、行為者である人間を中心に述べる。それに対して日本語では、行為者である人間を表に出さず、事物や事柄ないし状況を中心に述べる。したがって次の感覚動詞を含む例文において、英語では、ひとが見る、聞く、思うという表現をとるが、日本語では、人が見、聞き、思うのではなく、ことが見える、聞こえる、思われると表現される。

- (1) 妻がデイヴィッドソン夫妻と話しているのが見えた。

He saw his wife talking with the Davidsons.

やがてダンスする音が聞こえた。

Presently they heard the sound of dancing.

やんでくれないと自分はわあっとさけび出すにちがいないと思えてきたり・・・

you felt that you must scream if it did not stop……

次のような知覚や認識、思考を表わす動詞についても同じことがいえる。

- (2) このことばを聞くと、心臓が激しく鼓動し始めた。

At these words I found my heart beating violently.

多くの学生はその試験がかなり不公平だと考えた。

Many students thought the exam to be rather unfair.

## 2 なわ張り

英語の come は話し手と聞き手のなわ張りへの移動を示す。日本語の来るは、話し手のなわ張りへの移動を示す。<sup>1)</sup>

次の例文において、日本語では、話し手の視点によるウチ的表現となっている。それに対して英語では、聞き手の視点によるソト的表現となっている。この場合、ウチ的表現である、going は非文となる。英語の go は、話し手のなわ張りから外への移動を示す。<sup>2)</sup>

- (3) いま行きます。

I'm coming/ \*going.

お待たせしました。いま、(ドアを) お開けします。

Sorry to keep you waiting. I'm coming now.

Come, go にはさらに次のような例がある。一般に、自然で正常な状態への変化には、come が、異常な状態への変化には、go が用いられる。

(4) 最後にはうまくいくだろう。

It will come right in the end.

今日、彼は平熱に戻った。

His temperature came down today.

どこが故障したのだろう。

What has gone wrong?

ジョンは酒で気が狂った。

John went crazy with drink.

### 3 間接受身文

日本語における間接受身文は、他動詞による場合 have/get + O + pp. で対応する。

(5) 財布を取られた。

I had my wallet stolen.

嵐で屋根を吹き飛ばされた。

We got our roof blown off in the gale.

自動詞による場合には、have + O + bare inf. が対応する。これは、迷惑、利害の受身といわれるものである。<sup>3)</sup>

日本語では、迷惑をこうむったという主観的なウチ的表現となっている。対応する英語では、迷惑の受身の表現に欠け、客観的なソト的表現となる。

(6) 妻に泣かれた。

I had my wife cry. → I felt very bad when my wife cried.

彼は父に死なれて困った。

He had his father die. → He lost his father.

雨に降られた。

We were/got caught in the rain.

### 4 視点

日本語では話し手を視点にする表現を用いる。英語では、聞き手ないし第三者を視点にする表現を用いる。<sup>4)</sup>

(7) 食事をお持ちしてよろしいでしょうか。

Are you ready for lunch?

静かにしろ、そうすれば危害は加えない。

Be quite, and you'll not be hurt.

それをあげますよ。

You may keep it.

税関でスーツケースを念入りに調べられた。

They examined my suitcase very carefully at customs.

## 5 否定疑問文(negative question)

日本語では主観的な前提に焦点を当てる。英語では客観的な命題に焦点を当てる。

(8) 泳げないの。

Can't you swim?

いいえ、泳げますよ。

Yes, I can.

ええ、泳げないんです。

No, I can't.

日本語では、相手の発話の前提部分（私はあなたが泳げないと思うがそれでよいか）に注意を払い、その前提の正誤について、はい、いいえと答える。英語では、答える側の命題部分（you can swim）が肯定であるか否かで yes, no が決まる。<sup>5)</sup>

## 6 動詞文・形容詞文

英語では本来客観的な叙述の動詞文を用い、日本語では本来主観的な判断を表す形容詞文を用いる。

(9) 英語のテストは悪かった。

I did poorly on the English test.

彼の運転は慎重だ。

He drives carefully.

Have 動詞に対応する例。

(10) 彼女は笑顔が素敵だ。

She has a nice smile.

彼は記憶力がいい。

He has a good memory.

## 7 名詞的表現・動詞的表現

英語は名詞を中心として展開してゆく構造であるのに対して、日本語は動詞を中心として展開してゆく構造である。前者は、モノ指向的な捉え方であり、後者は、コト指向的な捉え方である。

動作主名詞 (agent noun) によるもの。

- (11) 彼女はスキーがうまい。

She is a good skier.

彼は早起きだ。

He is an early riser.

あの男はときどき酔っぱらった。

The man was an intermittent drunkard.

動作名詞 (action noun) を目的語にしたもの。Have の例。

- (12) 彼女は変な夢を見た。

She had had a curious dream.

それを見せていただけませんか。

May I have a look at it?

もう一度あなたと話し合いたいと思っていました。

I've been hoping to have another talk with you.

動作名詞を目的語にするものには、さらに give, make, take などがある。

- (13) give a cry, give a strong pull, give a kick

make an answer, make a chance, make a request

take a breath, take a rest, take a walk

同族目的語 (cognate object) をとるもの。<sup>6)</sup>

- (14) 彼女は幸せな人生を送った。

She lived a happy life.

彼は競走に出場した。

He ran a race.

彼女はほほえんで感謝の意を表した。

She smiled (a smile of) her thanks.

名詞句に否定辞を含むもの。

- (15) 自分の仕事をこれほど立派にやったものはいない。

Nobody ever did his work better.

彼女は愚鈍そうな様子ではなかった。

She gave no impression of foolishness.

何も見えなかった。

I saw nothing.

名詞的表現が主語に生ずるもの。

- (16) こんなよい申し出を彼がことわるなんてばかだ。

His refusal of such a good offer is foolish.

彼が無事に到着したということがわかって、彼の家族は喜んだ。

The knowledge of his safe arrival delighted his family.

前置詞を用いたもの。

- (17) 成田へ着くとすぐに事務所へ電話をした。

On arrival at Narita, I phoned to my office.

彼は傘を取りに家に戻った。

He returned home for his umbrella.

ひとこと話すことになっている。

He is scheduled for a speech.

雪が降ったのと同じに。

like a fall of snow.

ふみ子が来ているし。

with Fumiko here.

感嘆文や慣用表現における省略。

- (18) ずいぶん買い込んだのね。

What a supply!

幸運を祈る。

Good luck to you.

名詞的表現には、形容詞的表現が対応するものもある。

- (19) 彼は親切にも私を待ってくれた。

He had the goodness to wait for me.

私は彼の意図を全く知らなかった。

I was in complete ignorance of his intentions.

主語の位置に生ずるもので、形容詞的表現に対応するもの。<sup>7)</sup>

- (20) 公務から解放されたため、彼はその研究を続けることができたようになった。

His freedom from official duties made it possible for him to continue his

study.

実を言うと、君は来るべきではなかった。

The truth is that you ought never to have come.

日本語が名詞的表現で英語が動詞的表現。

(21) 今日は車ですか。

Are you driving today?

僕はワインだ。<sup>8)</sup>

I'll have wine.

今から学校です。

I'm going to school.

せめて人相だけでも覚えておこう。

He would at least try to remember what she looked like.

加代のアクセントが変なんだ。

There was something wrong with the way she said it.

私は雰囲気というつもりで言ったんだけど。

I mean there was something I could sense about you.

## 8 モノ・トコロ

英語はモノ的な捉え方をする。日本語はトコロ的な捉え方をする。<sup>9)</sup>

(22) 日本の首都はどこですか。

What is the capital of Japan?

次の駅はどこですか。

What is the next station?

英語では首都、駅がモノとして捉えられているのに対して、日本語では、それを場所である、トコロとして捉えている。

さらにこれは、言葉の定義づけの中にも見られるという。

(23) 競技場＝競技を行う場所。

Stadium = a building for sports, consisting of a field surrounded by rows of seats.

英語では、立体的な捉え方をするのに対して、日本語では、平面的な捉え方をする。この対照はさらにトランク型・フロシキ型という文化の捉え方につながっている。

## 9 地・図 (ground・figure)

日本語では、場所が図として、前景化され、主体である人間は、背景である、地となっている。英語では、主体である人間が、前景化され、図となり、場所は背景である、地となっている。<sup>10)</sup>

(24) ここはどこですか。

Where am I?

お住まいはどこですか。

Where do you live?

## 10 一般・特定

英語ではまず一般的な表現をして、そのご特定な表現をする。日本語では、普通そのような区別立てをしない。

(25) 彼は私の肩をぽんとたたいた。

He patted me on the shoulder.

あの子は庭で遊んでいます。

He's playing out in the garden.

空に南十字星を探した。

I searched the heavens for the Southern Cross.

彼からお金を取った。

They robbed him of his money.

## 11 線的・点的

英語は、物事を長さのある線的なものとして捉える。日本語は、物事を長さのない点的なものとして捉える。

(26) 結婚して25年になる。

They have been married for twenty-five years.

父は10年前に亡くなりました。

My father has been dead for ten years.

## 12 否定辞繰上げ (NEG-raising)

英語では、think, believe, suppose, imagine, expect のような思考に関する動詞の場合、否定辞を主節に繰り上げて表現するのが一般である。しかしながら対応する日本語の文では、否定辞が従属節にある。<sup>11)</sup>

(27) まちがっていないと思います。

I don't think I'm wrong.

このパンの重さは正しくないと思う。

I don't believe that this loaf is the right weight.

### 13 描出話法 (represented speech)

直接話法は、登場人物のこぼれをそのままに示すものであり、主観的なものである。それに対して間接話法は、もともとの話し手のこぼれを報告者が伝える表現のしかたであり、客観的なものである。前者では、作中人物が直接に話すものであり、話し手の視点が強調される。後者では、話し手の視点は語り手ないし作者の視点に吸収される。

客観的な地の文の中に、人物の心の中のつぶやきを直接示す方法がある。いわば客観と主観、間接話法と直接話法との中間をぬってゆくものである。これは話法における視点の移動であり、登場人物と一体になりその場にいあわせ、同じ思いを追体験させてくれるところの、臨場感に富むものである。これが、描出話法ないし自由間接話法 (free indirect speech)、体験話法といわれるものである。

(28) はっきりなさいませと、ちか子という風だった。

Don't you be dodging the issue, her manners seemed to say.

彼女は隣の人に、ミクラム婦人の顔を知っているかどうかたずねた。

最近あったことがあるかどうか。

She asked her next door neighbour if she knew Lady Mickleham by sight.

Had she seen her lately?

次の例は、日本語における描出話法が、対応する英語では、間接話法によって表現されているものである。

(29) 蟬も悪夢に怯えることがあるのだろうか。

He wondered if locusts might sometimes be troubled with nightmares.

### 14 否定 (negation)

日本語では否定が含まれているのに対して、対応する英語では肯定で表わされている。この場合、英語では否定の意味あるいは含みをもつものによって表現されている。<sup>12)</sup>

(30) 彼は年をとりすぎていて過酷な競技は出来ない。

He's too old to play any rigorous games.

人にそんなひどい口の利き方をするのはジョンしかいない。

Only John would speak to any one so nastily.



こんな長い橋は見たことがありません。

This is the longest bridge I ever saw.

誰にも分からない。

Who knows?

そんなことあるもんか。

I'll be damned if it is true.

次の例は、ていねい表現を含むものである。

(31) ドアを閉めてくださいませんか。

Would you please shut the door?

さらなる例。

(32) 手紙を投函するのを忘れないで。

Remember to post this letter.

そこを動くな。

Hold/Keep still!

日本語は肯定だが、英語では否定形。

(33) 坊や大きくなったね

Haven't you grown.

やってみたらどう。

Why don't you try?

## 15 ていねい表現 (politeness)

否定表現にする。対応する英語では、さらに過去形や仮定形を取る。

(34) 腰掛けませんか。

Won't you sit down?

行為者が表示されない自動詞表現にする。<sup>13)</sup>

(35) ワイングラスが壊れました。— 他動詞表現：メアリィがワイングラスを壊しました。

A wine glass broke. Cf. Mary broke a wine glass.

行為者が表示されない受身文で表わす。

(36) この論文は英語で書かれるべきである。— 能動文：あなたはこの論文を英語で書くべきである。

This paper should be written in English. Cf. You should write this paper in English.

迂言的なことばを用いる。垣根ことば (hedge word) や間接的発話表現 (indirect speech act) の用法である。これは、緩和性 (tentativeness) を持たせたことばの表現である。<sup>14)</sup>

(37) 多分あなたは正しいでしょう。— 直接的：あなたは正しい。

Perhaps you are right. Cf. You are right.

ジョンがここにいるかどうかお尋ねしたいのですが。

May I ask if John is here?

そう言わなかったかね。( = そう言ったはずだ。)

Didn't I tell you so? ( = I told you so.)

## 16 語彙

日本語、英語はそれぞれ、物事をどのように捉えるか。ここには、文化やメタファー一般が関わってくる。<sup>15)</sup>

(38) 彼女はやかんにお茶の湯をわかした。

She boiled water in a kettle for tea.

私は、かまで稲を刈った。

I reaped rice with a sickle.

母は網で魚を焼いた。

My mother cooked fish on a grilling net.

彼は何も言わずにただ首を横に振った。

He just shook his head without saying anything.

彼女は小首をかしげて見せた。

She just cocked her head.

彼らは列車で窓から顔を出していた。

On the train they had their heads out of the window.

今でも腕前を落とさないように時々はテニスをする。

Even now, I sometimes play tennis to keep my hand in the game.

強肩の持ち主。

Strong armed outfielder.

いい選手になるにはもっと足腰を鍛えなさい。

If you want to become a good athlete you have to toughen up your legs more.

それを見ると胸が悪くなる。

It makes me sick at my stomach to look at that.

老いも若きも。

Young and old.

あれこれ。

This and that.

前後左右。

Right and left and backward(s) and forward(s).

東西南北。

North, south, east and west.

私はハンドルの前に座った。

I sat behind the wheel.

## 注

- 1) 神尾 (1990) など。
- 2) 牧野 (1978)。さらに牧野 (1996) を参照。
- 3) 一般にこの受身は、非能格動詞にのみ現れ、非対格動詞には現れないとされる。影山 (1996), 高見 (2002) 参照。
- 4) 吉川 (1995)。
- 5) 小川 (1988b) を参照。
- 6) 一般にこの構文に現れる動詞は、非能格動詞のみであり、非対格動詞は現れないとされる。影山 (1996), 高見 (2002) 参照。
- 7) さらに名詞的表現一般については、江川 (1968), 小川 (1972) を参照。また Jespersen (1909-49), (1924) の Nexus substantive (ネクサス実詞) も参照。
- 8) 日本語の主語を捉えたものに『言語』(2004) がある。
- 9) 池上 (2000)。
- 10) 山梨 (2003)。
- 11) さらに荒木・安井 (編) (1992) 等を参照。
- 12) これに関しては、含意否定 (implied negation), 否定極性項目 (negative polarity item) を参照。
- 13) 牧野 (1978)。
- 14) Brown and Levinson (1987), 小川 (1988a), 鶴田他 (1988), 西光 (編) (1997) 等参照。
- 15) Lakoff and Johnson (1980) 等参照。

## 参考文献

- 荒木 一雄 (編). 1984. 『英文法用例辞典』東京: 研究社.
- 安井 稔 (編). 1992. 『現代英文法辞典』東京: 三省堂.
- 安藤 貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理』東京: 大修館.
- 別宮 貞徳. 1983. 『英文の翻訳』スタンダード英語講座 第1巻. 東京: 大修館.
- Brown, P. and S. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. (Reissued and extended version of 1978 monograph) Cambridge: Cambridge University

Press.

- 江川泰一郎. 1968. 『文の転換』 英語の語法 表現編 第11巻. 東京: 研究社.
- 市川繁治郎 (編). 1995. 『新編英和活用大辞典』 東京: 研究社.
- 池上 嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』 東京: 大修館.  
 ————— 2000. 『「日本語論」への招待』 東京: 講談社.
- 石橋幸太郎 (編). 1973. 『現代英語学辞典』 東京: 成美堂.
- Jespersen, O. 1909-1949. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. 7 vols. Copenhagen: Munksgaard. Heidelberg: Carl Winter. London: George Allen & Unwin.  
 ————— 1924. *The Philosophy of Grammar*. London: George Allen & Unwin. Rpt. New York: Norton (1965). (半田一郎訳 (1958) 『文法の原理』 東京: 岩波書店.)
- 影山 太郎. 1996. 『動詞意味論』 日英語対照研究シリーズ 第5巻. 東京: くろしお出版.
- 神尾 昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論』 東京: 大修館.
- 加藤 重広. 2001. 『日本語学のしくみ』 シリーズ・日本語のしくみを探る 第4巻. 東京: 研究社.
- 小林 裕子. 1991. 『しぐさの英語表現辞典』 東京: 研究社.
- 小島 義郎. 1988. 『日本語の意味 英語の意味』 東京: 南雲堂.
- 國廣 哲彌 他. 1978. 『日英語の比較』 現代の英語教育 第8巻. 東京: 研究社.  
 ————— (編). 1982. 『発想と表現』 日英語比較講座 第4巻. 東京: 大修館.
- 久野 樟. 1973. 『日本文法研究』 東京: 大修館.  
 ————— 1978. 『談話の文法』 東京: 大修館.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. (渡部 他訳 1986 『レトリックと人生』 東京: 大修館.)
- 牧野 成一. 1978. 『ことばと空間』 東京: 東海大学出版会.  
 ————— 1996. 『ウチとソトの言語文化学』 東京: アルク.
- 卷下吉夫・瀬戸賢一. 1997. 『文化と発想とレトリック』 日英語比較選書 第1巻. 東京: 研究社.
- 松田徳一郎 (編). 1999. 『リーダーズ英和辞典』 東京: 研究社.
- 松浪 有 他 (編). 1983. 『大修館英語学事典』 東京: 大修館.
- 水谷 信子. 1985. 『日英比較 話しことばの文法』 東京: くろしお出版.
- 西光 義弘 (編). 1997. 『日英語対照による英語学概論』 東京: くろしお出版.
- 野田 尚史. 1996. 『「は」と「が」』 新日本語文法選書 第1巻. 東京: くろしお出版.
- 小川 洋通. 1972. 「英語名詞化論」 『富山大学教育学部紀要』 第20号.  
 ————— 1974. 「新しい情報と古い情報」 『富山大学教育学部紀要』 第22号.  
 ————— 1988a. 「ていねいさの諸相」 『富山大学人文学部紀要』 第13号.  
 ————— 1988b. 「否定疑問文」 『英語青年』 第134巻, 6号.
- 大塚 高信・中島 文雄 (監). 1982. 『新英語学辞典』 東京: 研究社.
- Quirk Randolph, Sidney Greenbaum, G. N. Leech & Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow: Longman.
- Seidensticker E.G.・安西徹雄. 1983. 『日本文の翻訳』 スタンダード英語講座 第2巻. 東京: 大修館.  
 ————— 那須 聖. 1962. 『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』 東京: 培風館.
- 鈴木 孝夫. 1973. 『ことばと文化』 東京: 岩波新書.
- 高見健一・久野 樟. 2002. 『日英語の自動詞構文』 東京: 研究社.

日英比較表現論

- 寺沢 芳雄 (編). 2002. 『英語学要語辞典』 東京：研究社.
- 鶴田 庸子・P. ロシター・T. クルトン. 1988. 『英語のソーシャルスキル』 東京：大修館.
- 楳垣 実. 1975. 『日英比較表現論』 東京：大修館.
- 山梨 正明. 2003. 「認知言語学からみた日本語研究」『文法 I』 朝倉日本語講座 第5巻. 東京：朝倉書店.
- 柳父 章. 1979. 『比較日本語論』 東京：日本翻訳家養成センター.
- 安井 稔 (編). 1987. 『例解現代英文法事典』 東京：大修館.
- (編). 1996. 『コンサイス英文法辞典』 東京：三省堂.
- 1996. 『英文法総覧』 改訂版 東京：開拓社.
- 吉川千鶴子. 1995. 『日英比較 動詞の文法』 東京：くろしお出版.
- 『言語』 2004. 「日本語の主語を捉える」 第33巻, 第2号. 東京：大修館.